ひとり語り

「母の語る多喜二」

小林セキ（述）　小林廣（編）より

脚本　栗木英章

いつでも　どこでも上演できる

約三十分の一人語り・・・

次の解説がスライド又はめくり、などによって表示される。

「一九四六年（昭和二十一年）二月
小林多喜二の十三回忌に
母セキは息子多喜二のことを
問われるままに語ります」

一人仏壇にお参りするセキ
小林多喜二の遺影が浮かび上がる。
遠く吹雪の音が聞こえる。

セキ　（振り返り、ふと）吹雪ですかいな？へっ　外は晴れています？
（彼方を見やり）そうですな、薄日が差し込んでましたわ・・・
それで、多喜二のことを話せと、まあ倅（せがれ）のことは手塚（英孝）先生やたくさんの御方が語ったり書いて下さっておりますので私なんかがあらためて申すことはございませんが・・・はっ、母親として話してくれ、と。・・・ほんとは　この時期あまり思い出したくないことも、いえ、いえ、正直多喜二のことがわたしの頭から離れたことはございません。あろうはずがないじゃありませんか・・・。「ああ、またこの二月の月が来た。本当にこの二月という月が嫌な月、声を一杯に泣きたい　どこへ行っても泣かれない。ああ、でもラジオで少し助かる　ああ涙が出る　眼鏡がくも　る・・・」

かすかに風の音

セキ　やっぱり、風が吹いております・・・はい、私の耳にはいつも冷たい吹雪の音が聞こえて離れないのです・・・（卓のノートを手にして）人様にお話するのに、間違ったことを口にしては申し訳ないので、帳面に書き記したものを見ながらで、ごめんなさいよ。（と言いつつ眼鏡をかけて）平仮名ばかりですからどうしても長くなって・・・倅は仮名だけ読み書きできるようになったから上出来だと・・・ほんと、多喜二はあたたかく、やさしい子でした・・・。
（遠くを見やる）はい、ぽつぽつと思い出しながらですまんことですが、多喜二のことをお話するには順序として郷（くに）里の事から始めさせてもらいましょうか。私どもの郷里は秋田県の北秋田郡で一番北寄りの釈迦内という小さな農村でした。この村に日景仁八（ひかげじんぱち）という農家があり、仁八の娘おふりというのが私の母です。おふ

りが同じ村の木村伊八に嫁ぎ、長女の私と弟の勇八、勇吉の三人を産みました。私の母も一寸変わった人で、無学文盲ながら記憶力がよく、家の前の禅寺の内儀(おかみ)から両国三十三番の御詠歌なぞ習い暗記をしていたものです。(ふと耳をかたむける)

村から近い早口駅より東北へ一里半位のところに下川沿村があって、その部落に自作兼小作農を営む小林多喜郎という家があり、その次男末松に私が嫁いだのは明治二十年、私が十五歳、夫末松が二十二歳でありました。当時は十五で縁付くのは普通のことではありましたが、何といっても未だ子供ですから舅、姑の命令通り、はいはいと動いていたのです。舅の多喜次郎は大の読書家で、七十三で死ぬまで本を離したことはありませんでした。多喜次郎の跡は、本来なら長男の慶義(けいぎ)が嗣ぐはずが、当時は北海道熱が流行(はや)った時で、慶義も小樽に腰を据えて、三ツ星という屋号で菓子屋を学んでおったのです。明治の末頃になると、三ツ星パン屋といえば小樽でも指折りのお店となっていたので、私たち夫婦は親の家業を継いだわけです。夫の末松は人がよくて、閑(ヒマ)さえあれば本を読むのを楽しみにしていました。私と夫との間には次々と九人の子供が生まれました。その内の三人は早死にしましたが、次男多喜二が生まれたのは明治三十六年旧暦の八月二十三日、夫は三十九、私が三十一のときでした。名前は舅の名からもらいました。

多喜二の幼い時のことは別段取り立ててお話するようなこともなく、唯(ただ)スクスクと順調に育ちました。多喜二の生まれた翌年が日露戦争、その戦争も二年足らずで平和になり、景気もだんだんよくなってきました。多喜二が四つになると妹のつぎ子が生まれ、子ども四人の賑やかな家族となりました。

ところが間もなく、小樽の兄の事業がつまづき、そのため田畑の何割かも取られて私どもの暮らしも苦しくなってきました。相談の上、長男の多喜郎を小樽の兄のところへやり、多喜郎自身もあちらで勉学に励んでいたのですが、突然脳膜炎で急死してしまいました・・・私たち家族の落胆は何にたとえようもありません。その悲しみを断ち切るためにもと、家族あげての小樽行きを決断したのは明治四十年のことでありました。向い風がヒューヒューと吹く寒いころのことです。

列車の走行音

小樽へ移ってみると、なるほどその繁栄ぶりというかにぎわいにびっくりしました。正月には初売りの店の混み合い、新しい印半纏（しるしばんてん）に得意先の印し、同じ印の入った真新しい手拭で鉢巻をした若い衆が七、八名も荷物を積んだ馬橇（ばそり）に乗り、幟や旗をなびかせて馬の胸に鈴を列（なら）べ、勢いよく走らせると　石油の空きカンがジャンジャンと叩かれ・・・ともかく人、人、人で大にぎわいです。三ツ星パン屋も眼の廻る忙しさでした。私たちは早速、場末の若竹町に一戸を構えて　三ツ星パン屋のささやかな支店を 開きました。そこは埋立工事やら防波堤工事が盛んに進んでいて幼い多喜二の眼にもそうした労働の光景や、悲惨な暮らしが焼き　つけられたのだろうと思います。

お店は順調に繁昌して、明治四十三年には長女ちま子が汐見台小学校に入学し、中一年おいて多喜二も同じ学校へ入学しました。嬉しいことに二人の子供は学校の成績がよくて益々励んでいくようになったのです。多喜二は六年間無欠席で通し、卒業の時は特別な褒賞を頂きました。小学校を卒業すると、すぐ庁立小樽商業学校へ入学しましたが、その頃には弟の三吾、妹のゆき子も生まれていて、一家七人の大家族となっていました。早いもので秋田から移住して足掛け十年至ち、明治から大正に変わって五年という年でありました。

そうそう、その頃多喜二のノートにこんな詩が書き記してありました。「かなしきは小樽の町よ／歌うことなき人々の／声の荒さよ」これが石川啄木の詩（うた）だと知ったのは随分あとのことです。多喜二は十四の四月、庁立商業に入学し、十九の三月に卒業しましたが、この中等学校の五年間について、二、三お話し申します。　若竹町から学校までは約一里もありますが、多喜二は毎日歩いて通いました。親というのは子どもには目のないもので、多喜二が　新しい服に白線のついた新しい帽子を冠（かぶ）って鞄を肩からかけ、行って参りますと店を出る姿を見て、ああ多喜二も中学生になったんだなあと、夫ともども店先に立っていつまでも眺めたものです。

この中学生時代には勉強の傍（かたわ）ら　父親と一緒になってパン工場の手伝いをしたり、配達をさせられたり、本店や自分の店の仕事を色々手伝わされたものです。本店の兄は「気を使うな」と言ってくれたものの、多喜二は世話になっていることを考えて、嫌

な顔一つせず、よく働いてくれました。多喜二の小説に「転形期の人々」というのがありますが、郷里を出て小樽に移り中学に入るまでの筋は多喜二の実感を現わしているのだろうと思います。その頃の中学校は運動熱が盛んでしたが　多喜二は文学の方を好み、たしか（本を見て）「文章世界」の一九二〇年五月号に「北海道の冬」という詩が選外佳作で載りました。何か難しくて、私なんかは終わりの数行ぐらいしか読めません。（本を手にして）

「・・・ああ山屋の灯は赤く 静かで、／赤く錆びた銃をいじる父の影は大きい、／炉ばたの猫は何かしら夢み、／ともすれば、／詩を読む眼は物淋しく心を凝視す。／ああやつれし母の顔に刻む深い陰影は、／ぐっと私の胸を押す」・・・これより、私は「喜こび」というこっちの方が身近に感じます。「灰色のカーテが薄ずれて／甘いミルクの光が流れ込む／窓際の葉ずれ／ピアノのかすかな独言（ひとりごと）／ぽたりぽたりと落ちる雪解の滴に／薄絹の　春がしのび足に／窓から覗（のぞ）いた」

（客席に）皆さん、ちょこっとお疲れですか…ではこのまま続けさせてもらいます。やがて商業学校を卒業した多喜二は、さらに兄の援助を受けて、小樽高等商業学校に進むことになりました。三・八倍の競争でしたが見事に突破。その自由主義的な校　風の中で、多喜二は増々文学の方へのめり込んで行ったのです。たしか、三つの短編小説が、「小説倶楽部」や「新興文学」に入選発表されました。大正十二年、一九二三年には関東大震災が起きて、大杉栄という人たちが主義者ということで殺されましたが、平沢計七という作家も犠牲者になりました。多喜二は弔文を送っています。その年に卒業すると、多喜二はれど相続人の多喜二が立派な会社に就職でき、姉のちま子すぐ北海道拓殖銀行小樽支店へ勤務し始めたのです。次男ではあるけも嫁にやってホッと一息ついたとき、夫の末松は急に病を得て死んでしまったのです。心臓病ということでした。世の中というものは思うようにいかないものです。家族はただ呆然とするばかり、葬儀も後始末も夢の内に済ませたのでした。でもいつまでもぼんやりしている訳にもいかず、とにかく父親のない後は多喜二を頼りにして、一家仲よく励み合い、細々ながらも店を続けていくことにしたのです。多喜二は毎日銀行へ通いました。同時に同人雑誌「クラルテ」を創刊しました。扉にはアンリ何とか言う人の「クラルテ」から引用したこんな文章を載せております。「そうだ、此の世には一つの神が存在する。吾々の広大な内的生命を導くためには、また、全人類の生命のうちに含まれている分担を導引くためには、決してそ

れから眼を外らしてはならない一つの神が存在する。真理という神だ」・・・この意味はわからないにしても、多喜二の熱い気持ちは痛いほど伝わってきます。この同人誌は、その前の年、関東大震災と弾圧で休刊をよぎなくされた「種蒔く人」の灯を小樽にかかげるという志もあったのでしょう。

同じ年十月ごろ、多喜二は「クラルテ」の友だちと好奇心から裏町の「曖昧屋」に出かけて、不幸な境遇の田口タキさんとはじめて出遭ったのです。その後、タキさんと会うごとに、非人間的な暮らしを強いられている女たちの世界は多喜二の心を深くとらえ、またタキの姿は忘れることのできないものになっていきました。

・・・たしか一九二五年の秋、タキさんが一日も早く自由の身になりたいと思って、少しずつ血のにじむようなお金をつみ立てていることを知った多喜二は考えあぐんだ末親友の島田さんに頼み込んで二百円もの大金を借りました。それでもやまき屋から救い出すための五百円に足らず、わしに年末の賞与を全額使うことを申し出たので、もちろん承諾しましたよ。あとは高利貸しから借金をして、暮れもおしつまって根雪が深くなったころ、やっと救い出すことができました・・・いったんは義父のもとに引きとられましたが、どん底生活のため、いつまた売りとばされるやも知れず、翌年の四月に我が家へ住むように段取りしました。はい、多喜二は弟の三吾にバイオリンの先生をつけて、音楽で身を立てるように按排したりと、ほんとにまわりの者の幸せをいつも考えておりました・・・親の口から言うのも何ですが、ほんとにやさしい子でした・・・

時代は大正から昭和に入って、多喜二が銀行へ勤めてからもう三年目から四年目になりました。銀行の信用も得て、一応の出世も見込めるようでしたが、コツコツと小説を書き続け、同時に社会のおもむきにも強い関心を寄せるようになっていきました。そうして、昭和四年に発表した小説に『蟹工船』と『不在地主』というのがあります。その『不在地主』は、小樽の有名な地主の磯野さんという方のところの小作争議を取り上げたものですが、この方が生憎と多喜二の勤める北海道拓殖銀行の大株主さんだったもんだから、俄然多喜二の身辺に圧力が加わってまいったのです。重役から「辞職をするか、それとも政治運動から手を引き文章活動もやめるか」と迫られて、ついに銀行を退めてしまったのです。

多喜二が小説家になりたいという熱い気持ちはよくわかっていたし、どうせなら専心精進して立派な小説家になってほしいと思い、私らも辞職に同意いたしました。そして東京行きを決断したのです。お店の方は当時二女のつぎ子が幸田佐市という青年と結婚してある村に住んでいたので、まかせることにしました。えっ？タキさんとはどうなったかって？はい、両方の家とも、よい縁だと喜んで、タキさんもほんとに気配りよく立ち働きもしてくれていたのですが、二ヶ月くらいしたら突然と家を出てしまい行方がわからなくなりました。何日も探した結果、花園町の小野病院で女中に住み込んでいたのです。何故家出したのかと問うと「お母さん始め家族の皆さんが各々働いているのに　自分一人お客様扱いにされているのが有難いやら勿体ないやら・・・それに自分という者が多喜二さんの側にいると、多喜二さんの勉強の邪魔になると思うので、皆さんから離れて働こうと、それで無断で家を出ました」という涙ながらの話・・・多喜二も色々説いて話したのですが、タキさんは一途に多喜二の出世を願い、それまではお互いに自制して離れていましょうと、再び帰って来ようとはしないのです。多喜二の上京後、間もなくタキさんも東京へ出て美容師になる勉強をして苦労に苦労を重ねて、貧しい弟や妹を救い　出して一人立ちさせたのです。多喜二の死んだときは泣いてお詣りしてくれましたが　私たちのことは今でも忘れず、毎年多喜二の命日にはお手紙やらお供物やらを貰っております。お手紙には、私を親のように慕っていることが書かれていますので、これが多喜二が生きていたら・・・とまた不覚にも涙が落ちてくるのでございます。

ひとしきり泣く
やがて湯のみから水を一呑みして

失礼しました。多喜二が東京へ着いてすぐ便りは来ましたが、こちらに心配をかけまいとてか、いつも東京の様子や自分の暮らし向きのことをこまごま書いてくるだけでした。

そのうち北海道にも春が来て、桜の花も散り、六月の札幌祭りの季節になりましたが、その頃からフッと便りがなくなったので、私どもは「もしかして思想方面のことで事件でもあったのか」と心を痛めておりました。今年は丁度亡夫の七回忌でもあり、その法要日にはきっと顔を見せるだろうと、多喜二の好きな西瓜（すいか）を買って待っていたのですが・・・帰ってこないのも道理、この六月、お上に捕らえられて豊多摩の刑務所に入れられていたのです。多

喜二が拓殖銀行を辞職してから、どうもお上の監視が厳しくなり、二年前の昭和三年三月十五日の全国的な共産党員検挙以来多喜二もその仲間と睨まれていたようです。

しかし私としては、多喜二の思想がどうあろうと、多喜二は私にとってはかけがえのない息子なのです。それが今捕えられて冷たい刑務所に日の光も浴びずにいるかと思うと、可哀そうで可哀そうで、羽があったら飛んで行って抱きしめたい衝動にかられ、居ても立ってもいられないほどでした。どうぞ一日も早く娑婆へ出られますようにと、唯神仏におすがりするより外なく、その頃の私は一夜として満足に眠れたことはありませんでした。

私は何とかして自分の心にあることを、曲がりなりにも書いて知らせてやりたいものと、それこそ本当の六十の手習いですが、夜は眠られぬままに「いろは」の手本を書いてもらい、それで毎晩毎晩勉強して、どうやら金釘流（かなくぎりゅう）の手紙を書けるようになったのです。その手紙が冷たい独房の中で読まれるのだと思うと、夜毎、多喜二の置いていった机に向いながら、我知らず巻紙の上に泪がしたたり落ちました。（間―）

こうしていつしかこの年も暮れ、明くる年の一月下旬、多喜二は保釈されて　明かるい世界へ出ることになったのです。やがて春となり、多喜二から「一家を持ったから私や三吾に上京してくるように」との便りがきました。いよいよ親子揃うて暮らすことができるのです。三吾も好きな音楽の勉強ができるであろうし、多喜二もみっちりと小説を書いて、兎（と）に角張り合いのある生活ができるものと、早速上京の準備にかかりました。店の方は幸い幸田夫妻が来て以来繁昌を重ね、屋号も加賀屋と改めています。身軽に親子二人が住み馴れた小樽を発ったのはその年の七月でありました。私たち一家が秋田から小樽へ移り住んで二十五年、私にすれば小樽は第二の故郷なのです。小樽を後にして私は、老いては子に従うの通り、最後の安住の地として東京に住む覚悟で東京へ向かったのです。

列車の走行音
汽笛が長く尾をひく

多喜二の家というのは　阿佐ヶ谷の馬橋（まばし）というところで、部屋は八畳、六畳、三畳の三間の他　台所のある一軒家でした。周囲には野菜の少し

位作る畑や竹藪なぞもあり、本当に静かな住みよい、そして陽当りのよい住宅でした。私は庭先の土いじりをしたり近くを歩きまわったり、三吾は好きなバイオリンに打ち込んで近衛秀麿さんのお邸にも招かれたこともありました・・・和やかな日々、でも・・・また風が強くなってきました。吹雪にでもなるのでしょうか。（耳をかたむける）

丁度その年の秋から満州事変が発生して、そのせいか多喜二たちの活動が眼に見えて忙しさを増してきました。多喜二は日本のプロレタリア作家同盟たらいう団体の書記長になっていたんですな。多喜二が身体をこわしはしないかと案じられてなりませんでした。今に嵐が襲いかかる・・・多喜二は予期していたこととみえまして、三吾にいざという時の心構えを伝えていたようです。多喜二の好きな花々が春を彩っているころ、忽然と地下に潜んでしまったのです。商人を始め、郵便配達、隣近所の人の出入りにまで当局の眼は鋭く光って　私たちは幾度となく訊問を受けたものです。夜、雨戸がカサカサとでも風で鳴るときにはもしや多喜二が忍んで来たのではないかと眼を醒まし、じっと聴き耳を立てました。（風の音しばらく）

ところがある日のこと、三吾が多喜二の同志から　ある連絡がついて、秘密に会えるという知らせを持ってきたのです。それは待ちに待った喜びでもありますが、一方それがために多喜二が捕らえられるようになったらと思うと、本当に空怖ろしいことでもあります。

用心、用心と心に念じながら会うまでの準備を始めました。それは朝夕涼風が吹き始める九月の半頃だったでしょうか。小樽からちま子母子が私を訪ねて上京してきました。そこでちま子母子を東京見物に案内するという風に装いやっとの思いであるレストランで落ち合いました。しばらく会わなかったのでやつれ弱っているのではーと案じていましたが、多喜二は元気でいつもと変わっていませんでした。この時多喜二が、私たちをきちんと見て申したことは今でも覚えています。

「今、警察に捕えられたらどんな目に遭うか判らないが、こうした時世に生まれ合わせたのが自分の天運であって、きっといつかの時代には自分たちの考え方が、世間の人にも納得できることになろう。ただそれまでの間にはどれだけの犠牲を払わねばならぬ

のか。その犠牲の一人となるだろう自分は、不幸かといえばそうではなく、これも自分に与えられた運命と思う」と。

一瞬私は、無理矢理多喜二を納得させて家に連れ帰ろうかと思いましたが、多喜二の固い決意を聞くと、やはり多喜二は多喜二の信念どおりにさせる道こそ本望であろうと、言葉をのみ込みました。別れ難かったけれど、長居すれば危いと考え、あわただしく別れましたが、それがこの世の最後の行き別れになろうとは・・・これ、多喜二、お前は歩くとき肩をゆするクセがあるので、すぐわかるぞ・・・(小声で)すぐわかる・・・すぐわかる・・・

衝撃音
録音にて、次の音が流れる

声「都新聞記事 プロ作家小林多喜二氏 検挙されて急死。赤坂で街頭連絡中捕われ取調べ中 心臓麻痺ー 名作「蟹工船」以来左翼文壇の重鎮として活躍してきたプロレタリア作家小林多喜二(三十一)氏は、昨秋文化盟の弾圧後、宮本顕治氏と共に巧に地下に潜り、警視庁特高当局はその後極力捜査を続けていた処、築地署員が二十日正午 小林が赤坂溜池停留所付近で街頭連絡を行う事を突きとめ、溜池付近を警戒中、小林がやってきたのをみとめ、逮捕せんとするや 小林は逸早く逃走を企てたが、数十町追跡の後逮捕、直に築地署に引致して午後一時から同署水谷高等主任が取調べに当った処、身体の苦痛を訴えるので、一時取調べを打切り留置。さらに苦痛を訴えるので築地病院の前田博士の検診後、午後六時同病院に入院せしめ、手当てを加えたが、同七時四十五分、遂に絶命、同博士の診断によると死因は心臓麻痺と・・・」

セキ 伝えられたところによると多喜二の最期の言葉は・・・「国許へ知らしてくれ」「改造の『地区の人々』は国の人達が困っているので書いた」とか・・・。

思えば二十日の夜のことですが、わたしは何だか胸騒ぎがして眠られず、ようよう眠ったかと思えば胸に圧迫を感じ、汗がびっしょり肌にまとわりついて・・・その時分こそ多喜二が断末魔の苦しみの中、「お母さん、お母さん」と私の胸にすがりついていたのではないかと思われます。

二月二十一日、冷え冷えとする夕方、たしか隣の奥さんが「夕刊に多喜二さんが死んだと出ている」と知らせてくれたので、私

は動転して頭が真っ白になりました。私は幸田の孫をねんねこでおんぶして自転車で築地署に駆けつけ、半狂乱になって飛び込みました。

すぐさま築地病院へ回り、変わり果てた多喜二の姿と対面したのです。その時の私の驚き、嘆き、悲しみは到底口にも筆にも現わすことはできません（雑誌や新聞の切り抜きを広げて）同志の人たちが、多喜二の死に関する記事をまとめてくれました。「大衆の友」には窪川いね子さんが通夜の様子を書いてくれています。（読む）「・・・玄関を上ると左手の八畳の部屋、もとの小林の部屋である。江口渙が塵紙を開けてうなづいた。床の間の前に横たえられた姿ーああやっぱり小林であった。我々はそばへ寄った。安田博士が丁度小林の衣類を脱がせているところであった。我々の目は一斉に、その無残に皮下出血をした大腿部へそそがれた。蒼白くこわばった両脚の太ももは、すっかり暗紫色に変じている。お母さんが、ああッ　おおッとうなるように声を上げ、涙を流したまま小林のシャツを脱がせていた。中条百合子はそれを手伝いながら『お母さん、気を丈夫に持っていらっしゃいね』と語りかけた・・・」（たまらず）心臓が悪いって、どこ心臓が悪い。うちの兄ちゃはどこも心臓がわるくねえです。心臓がわるければ泳げねえのに、うちの兄ちゃは子供の時からよう泳いどったんです・・・この、こめかみを打つということがあるか、ここは命どころだに。はア、ここ打てば誰でも死ぬ。・・・もう、何もわしの気持ちをおさえることはできん。　わしは襟をかき合わせてやり、今度は額を撫で、髪の毛をかきあげて叫んだ・・・・「それ、もう一度立たねか、みんなのためもう一度 立たねか」・・・・・・すり寄せた多喜二の頬は・・・冷たかった・・・ああ・・・　（泣く）

風の音　長い間

このあとのことはあまり申し上ぐることはございません。あまりといえばその頃の当局が、無茶苦茶の弾圧を強行したもので、これは時勢の為さしめたこととはいえ、今から見れば何という大きな相違（ちがい）でしょう。

多喜二はほんとうに親孝行でした。思えば前の年の九月、ちま子や三吾と一緒に会ったのが最期の別れでありました・・・私の今念願していることは、私一人の幸福ではございません。もし、

私が幸福であればあるほど、この果報を一人でも多くの人に領ち与えるようにと、心より望んでいます。

風の音　かすかに・・・

（ふとあたりを見回して）あれ、いつの間にか日が暮れてきました。風も少しやわらいできたようです。どうぞ気をつけてお帰り下さいませ。はい？申し残したことですか、そうですねえ、手塚英孝さんにこう言ってたそうです。「・・・書く人は沢山いるよ。だが、みな、手の先か、体のどこかで書いている。体だけはチャンと大事にしまっておいて、頭だけちょっと突込んでいる・・・みんなそうだ。誰か、体全体でぶっつかって、やる奴はいないかなあ・・・死ぬ気で、書く奴はいないかなあ・・・」お気にさわったら勘弁して下さいね・・・長いこと、多喜二のことを聞いて下さり、どうもありがとうございました。

深々と頭を下げる

― 了 ―

〈主参考文献〉

「母の語る小林多喜二」新日本出版社　小林セキ〔述〕小林廣〔編〕

「小林多喜二」新日本出版社　手塚英孝〈著〉

「小林多喜二」汐文社　土井大助〈著〉